

学習の場の設定を工夫する

— 想いの広がりや深まりを促す場づくり —

一 徹国語人

ほぼ日本全国（離島を含めて）、おおよその地域を訪れることができた。あちこちの学校に寄り、授業を参観したり教育事情を聞かせてもらったりした。

一般的には、都会のほうが研究会組織がしっかりしており、授業研究は充実している。しかし、先生個人の研究や工夫となると、そうとは言いえない。むしろ、農村漁村や都市郊外の学校の先生方のほうが、より確かな積み上げをしているように感じられた。

その実例を、「想像する力」を育てる学習であげてみたい。すばらしい発想・着想（思いつき）ができる力を支えているものは、その人が歩んできたまでの生活の中で得た知識や、体験の質や量だ。物や事に対して連想する力や、感想をもつ力にも、同じことが言えると思う。

学習の場では、これらの力を開発するだけでなく、いろいろな教材・学習の場・方法を使って、より確かな力とし、個々の児童が最初に抱いた想いを、さらに豊かに

構想する力へと高めるための工夫が必要とされる。

今回授業を参観させてもらったのは、東京の西郊・埼玉県に近い青梅市の小学校であった。

茶畑や、ツツジやサツキなどの植木材を育てている畑が、あちこちに点在する静かな学区だ。六年二組の児童は二十六名。担任は、研究主任と国語主任を兼任される、ベテランの先生である。

豊かな人間関係を育てる学習活動づくりを、国語科の「書くこと」を中心にして研究しているこの学校では、「目的や意図に応じて、自分の考えを効果的に書く力を育てる指導の工夫」という目標を立てて学習を展開していた。学習材として、以前六年の教科書の上巻にあった教材「二つの意見」（平成十四年度版）を利用し、異なる二つの意見から話し合つて考えを深め、意見文にまとめようというのである。このクラスでは、「大人が得か、子どもが得か。」に論点をしばっていた。おもしろいのは、比較

する対象が具体的に限定されていないことである。したがって、「子どもが得」という児童が、「大人が得」よりも倍以上いたのだが、論拠はばらばらであった。

担任の先生は、テーマを何にするか、決めるのが難しかったと言つ。子どもにとって興味があり、なおかつ話し合いで内容を深めることができるものでなければならぬ。それに、どんな論題にせよ、自分なりの考えをもつこと、取材や討論で人の意見に気づき、友達から学ぼうとする姿勢を大切にしたい。それを実現するテーマの選び方が、場づくりの工夫になっている。

「時間が自由だから」「悪いことをしても許されるから」「お小遣いやお年玉がもらえる」「税金を払わなくてもすむ」「働くより学校のほうが楽しい」「かわいい洋服が着られる」「子どもしか行けない所がある」「もう大人は子どもになれない」「親に頼つていれば生活ができる」「等々…三十四項目もの、「子どもが得」という考えが出された。

一方、「大人が得」という考え方は、二十六項目止まりだったが、子どもたちに想像できるのだろうかと驚くような発想が、いくつもあつた。例えば、「子どものために働くことができる」「子どもの成長を楽しみにする」とができる。」などがそれだ。

子どもたちが質問をしに出かけた相手は、夕方の駅前にいた仕事帰りの人、スーパーのレジ先で買物をしたお母さんやおばあちゃんたち、学校に来ていたPTAの人々や、先生方などであった。

まだ大人になったことのない子どもたちは、予想もしなかった発想に触れ、改めて考え込んだり、自分の考えを「大人が得」に変更したり、それでも「やがて大人になれるので、今は子どもの生活をエンジョイしたい。」と、以前よりも広く深い意味で考えたりして、それぞれの考えを文章にまとめていた。

この先生の場づくりが、子どもたちの学びをぐんと深いものにした好例である。

一 徹国語人にご意見・ご質問がある方は、広報部までお便りをお寄せください。一 徹国語人がお返事をいたします。お便りは、誌上にて紹介させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

FAX 03-3493-5483

E-mail : koho@mitsumura-tosho.co.jp